

アンケート概要

共同利用・共同研究拠点であるスラブ研究センターは、研究者コミュニティの意見を活動によりいっそう反映させていきたいと考えており、点検評価の一環として、共同研究員の方々を対象にアンケートを実施した（アンケート文については、次ページ以下を参照）。アンケートの実施時期、方法、対象者は、次の通り。

- 実施時期：2013年7月11日～26日
- 方法：インターネットアンケート専用フォームへの入力による回答（無記名方式）
- 対象者：スラブ研究センター共同研究員 148名
- 有効回答者数：104名（回答率70.3%）

センターでは、1999年にも同様のアンケート調査を行った。その際には、共同研究員136名のほか、センター刊行の『スラブ研究者名簿』（1997年版）から無作為に抽出した者70名を対象者とし、前者の回答者数が82名（回答率60.3%）、後者が34名（回答率48.6%）であった（詳しくは、『スラブ研究センターを研究する』No. 4-1、1999年を参照）。201頁以下で1999年のアンケート結果と比べる場合には、共同研究員に対するアンケート結果と比べている。

共同研究員へのアンケート

※該当箇所に印をおつけください

勤務先、専攻分野、研究対象地域について教えてください（2、3は複数回答可）

- 質問1 勤務先種類 1 国公立大学 2 私立大学 3 その他
- 質問2 専攻分野 1 人文学系 2 社会科学系 3 その他
- 質問3 主な研究地域 1 ロシア 2 中央ユーラシア 3 旧ソ連西部 4 中東欧 5 その他

センターの研究活動について

- 質問4 これまで、センターの研究活動にどのような形で参加されていますか？（複数回答可）
- 1 センターの研究員が中心となった科学研究費補助金やその他の資金による研究プロジェクトに参加したことがある。
 - 2 センターでのシンポジウムや研究会で報告者、討論者、司会者として参加したことがある
 - 3 研究プロジェクトに参加したこともないし、センターでのシンポジウムや研究会に報告者、討論者、司会者として参加したこともないが、研究会に出席したことがある。
 - 4 その他 具体的に[]
- 質問5 センター研究員の研究活動や学会での活動などを全般的にどのように評価していますか？
- 1 全体として国際的水準の高い研究業績をあげている
 - 2 全体として我が国ではトップクラスの研究水準を維持している
 - 3 国内でもトップクラスの研究水準に到達しておらず、改善・努力が必要である
 - 4 わからない
- 質問6 センターの国際的活動（国際共同研究、日本の研究の国際化および世界的な研究者コミュニティ活動への貢献）をどのように評価していますか？
- 1 高い成果をあげている
 - 2 一定の成果をあげている
 - 3 成果はあがっていない
 - 4 わからない
- 質問7 センターは2008～2012年度に文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」（田畑伸一郎領域代表）を組織しました。このプロジェクトをどのように評価されていますか？
- 1 非常に高い研究成果があがったと評価できる
 - 2 研究成果はある程度出され、意義はあったが、内容には不満足な面もあった
 - 3 期待された成果はあげられなかった
 - 4 新学術領域研究の内容についてある程度は知っているが、その内容評価について判断できない
 - 5 新学術領域研究の内容を知らない

●質問8 センターは2009～2013年度に文部科学省グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」（岩下明裕拠点リーダー）を組織しました。このプロジェクトをどのように評価されていますか？

- 1 非常に高い研究成果があがったと評価できる
- 2 研究成果はある程度出され、意義はあったが、内容には不満足な面もあった
- 3 期待された成果はあげられなかった
- 4 グローバルCOEプログラムの内容についてある程度は知っているが、その内容評価について判断できない
- 5 グローバルCOEプログラムの内容を知らない

●質問9 センターは毎年、夏期・冬期シンポジウムを開催しています。このシンポジウムをどのように評価されていますか？

- 1 国際的にみて高い水準にある
- 2 国内では高い水準にある
- 3 国内的にも高い水準にあるとはいえない
- 4 わからない

●質問10-A 外国人研究員制度をどのように評価されていますか？

- 1 高い成果をあげている
- 2 一定の成果をあげている
- 3 成果はあがっていない
- 4 わからない

●質問10-B 客員研究員（客員教授・准教授）制度をどのように評価されていますか？

- 1 高い成果をあげている
- 2 一定の成果をあげている
- 3 成果はあがっていない
- 4 わからない

●質問10-C 鈴川・中村基金奨励研究員制度をどのように評価されていますか？

- 1 高い成果をあげている
- 2 一定の成果をあげている
- 3 成果はあがっていない
- 4 わからない

センターの教育活動について

- 質問11 センターは、2000年度から北海道大学大学院文学研究科の歴史地域文化学専攻のなかに設けられたスラブ社会文化論専修において、大学院教育を行っています。この教育活動をどのように評価されていますか？
- 1 十分な成果があがっていると評価できる
 - 2 ある程度の成果はあるが、不満足な面もある
 - 3 あまり成果がなく、改善・努力が必要である
 - 4 センターは研究活動に専念すべきである
 - 5 わからない

情報・資料サービスについて

- 質問12 センターの資料（新聞・雑誌・図書等）をこれまでに利用したことがありますか？
- 1 ある 2ない

- 質問12-A 上で、センターの資料を利用したことが「ある」と答えられた方への質問。
あなたの研究にとってとくに重要なセンター所蔵資料はどれですか？（複数回答可）

1 新聞 2 雑誌 3 図書文献[マイクロ資料を含む] 4 その他 []

- 質問13 センター所蔵資料をどのように評価されていますか？

- 1 国際的に高い水準にある
- 2 国内との比較で高い水準にある
- 3 国内との比較でも高い水準にあるとはいえない
- 4 わからない

- 質問14 センターのホームページを利用されたことがありますか？

- 1 ある 2ない

- 質問14-A 上で、「利用したことがある」と答えられた方への質問。
あなたはセンターのホームページのとくにどの部分を利用されていますか？（複数回答可）

- 1 センターの活動紹介（ニュースレター、プログラム紹介を含む）
- 2 図書、出版情報
- 3 オンライン化された出版物（『スラヴ研究』、Acta Slavica、シンポジウム報告集など）
- 4 学会・研究会情報
- 5 データベース
- 6 その他 []

●質問15-A センターが刊行している和文雑誌『スラヴ研究』を全体としてどのように評価していますか？

- 1 非常に高い水準にある
- 2 比較的高い水準にある。
- 3 高い水準にあるとはいえない
- 4 わからない

●質問15-B センターが刊行している欧文雑誌Acta Slavica Iaponicaを全体としてどのように評価していますか？

- 1 国際的に高い水準にある
- 2 国内で刊行される欧文雑誌として高い水準にある
- 3 国内との比較でも高い水準にあるとはいえない
- 4 わからない

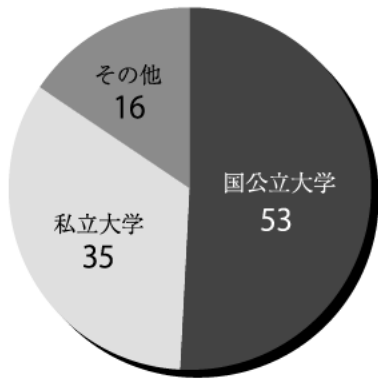
●質問16 上記質問以外の事項で、センターの研究、教育、組織・運営、共同利用・共同研究拠点としての活動、広報、社会連携、学会連携などについてご意見やご提言があれば、自由にお書きください

以上

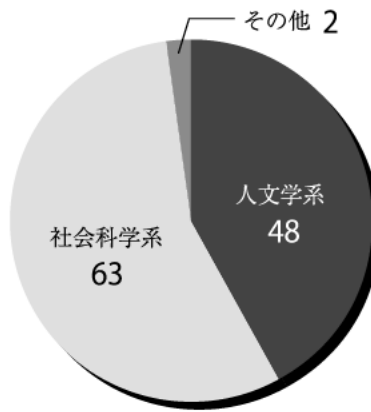
アンケート調査結果

勤務先、専攻分野、研究対象地域について教えてください

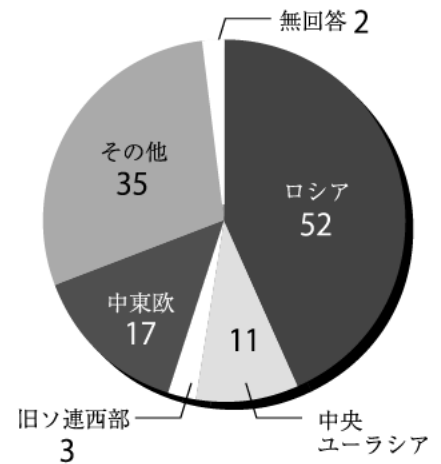
●質問1 勤務先種類



●質問2 専攻分野



●質問3 主な研究地域



質問1

勤務先種類	回答数	%
1 国公立大学	53	51
2 私立大学	35	34
3 その他	16	15

●その他の内容

大学以外の国立研究機関(独立行政法人を含む)(6)／公益財団法人(2)／非営利団体(1)／民間研究機関(1)／海外研究機関(1)など

質問2

専攻分野(複数回答可)	回答数	%
1 人文学系	48	42
2 社会科学系	63	56
3 その他	2	2

●その他の内容

自然科学系(2)

質問3

主な研究地域(複数回答可)	回答数	%
1 ロシア	52	43
2 中央ユーラシア	11	9
3 旧ソ連西部	3	3
4 中東欧	17	14
5 その他	35	29
6 無回答	2	2

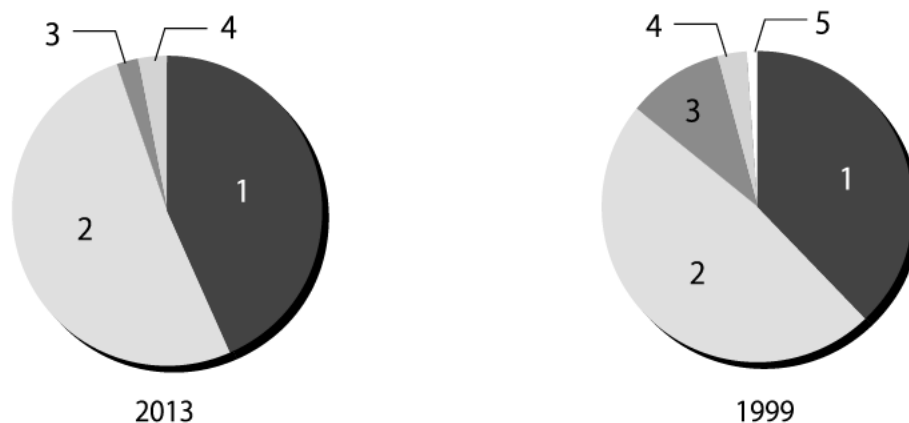
●その他の内容

アジア(23)／欧州(6)／北米(5)など

(質問2、3は複数回答可)

センターの研究活動について

●質問4 これまで、センターの研究活動にどのような形で参加されていますか？（複数回答可）

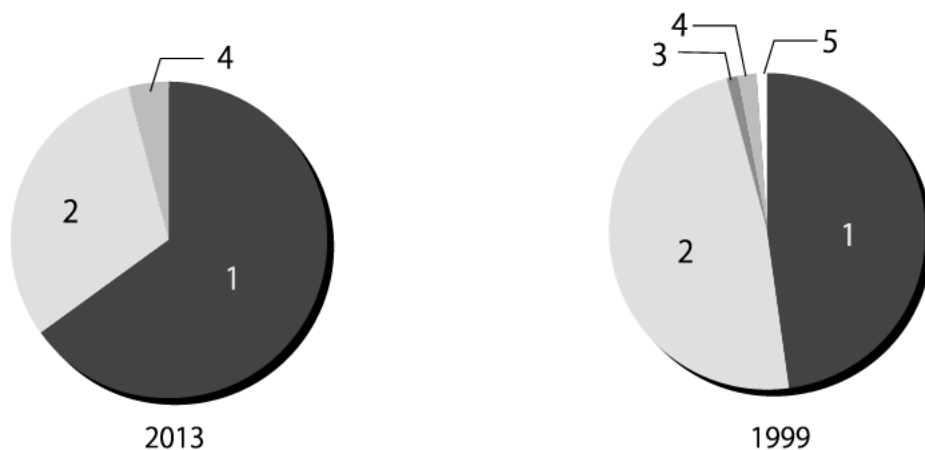


		2013		1999	
		回答数	%	回答数	%
1	センターの研究者が中心となった科学研究費補助金やその他の資金による研究プロジェクトに参加したことがある。	75	43	49	38
2	センターでのシンポジウムや研究会で報告者、討論者、司会者として参加したことがある。	90	51	61	48
3	研究プロジェクトに参加したこともないし、センターでのシンポジウムや研究会に報告者、討論者、司会者として参加したこともないが、研究会に出席したことがある。	4	2	13	10
4	その他 具体的に	6	3	4	3
5	無回答	0	0	1	1

●2013年 その他の内容

- ・COE研究者
- ・日本学術振興会特別研究者
- ・客員教授
- ・投稿論文の査読
- ・センター主催の市民講座での講演者
- ・非常勤研究者

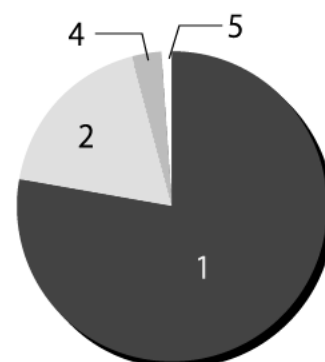
●質問5 センター研究員の研究活動や学会での活動などを全般的にどのように評価していますか？



		2013		1999	
		回答数	%	回答数	%
1	全体として国際的水準の高い研究業績をあげている	68	65	40	49
2	全体として我が国ではトップクラスの研究水準を維持している	32	31	40	49
3	国内でもトップクラスの研究水準に到達しておらず、改善・努力が必要である	0	0	1	1
4	わからない	4	4	2	2
5	無回答	0	0	1	1

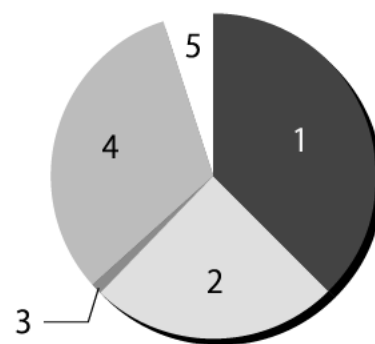
●質問6 センターの国際的活動（国際共同研究、日本の研究の国際化および世界的な研究者コミュニティ活動への貢献）をどのように評価していますか？

		回答数	%
1	高い成果をあげている	81	78
2	一定の成果をあげている	19	18
3	成果はあがっていない	0	0
4	わからない	3	3
5	無回答	1	1



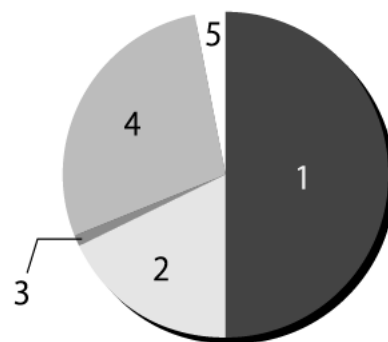
- 質問7 センターは2008～2012年度に文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」(田畑伸一郎領域代表)を組織しました。このプロジェクトをどのように評価されていますか？

		回答数	%
1	非常に高い研究成果があがったと評価できる	39	38
2	研究成果はある程度出され、意義はあったが、内容には不満足な面もあった	26	25
3	期待された成果はあげられなかった	1	1
4	新学術領域の内容についてある程度は知っているが、その内容評価について判断できない	33	32
5	新学術領域の内容を知らない	5	5

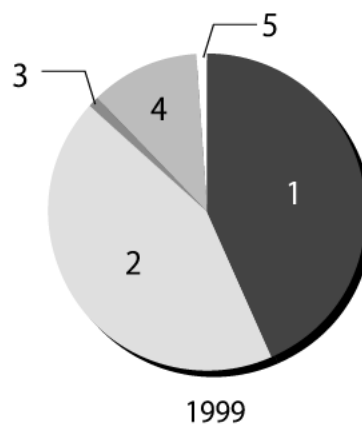
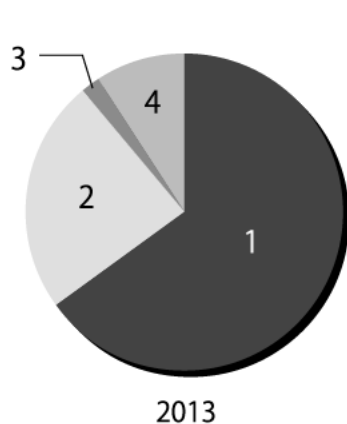


- 質問8 センターは2009～2013年度に文部科学省グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」(岩下明裕拠点リーダー)を組織しました。このプロジェクトをどのように評価されていますか？

		回答数	%
1	非常に高い研究成果があがったと評価できる	52	50
2	研究成果はある程度出され、意義はあったが、内容には不満足な面もあった	19	18
3	期待された成果はあげられなかった	1	1
4	グローバルCOEプログラムの内容についてある程度は知っているが、その内容評価について判断できない	29	28
5	グローバルCOEプログラムの内容を知らない	3	3



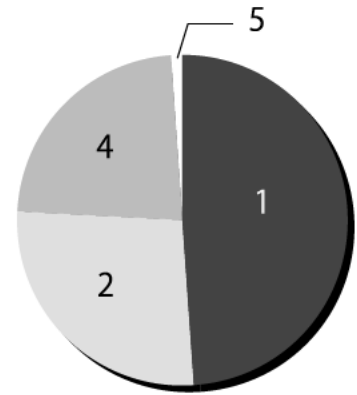
- 質問9 センターは毎年、夏期・冬期シンポジウムを開催しています。
このシンポジウムをどのように評価されていますか？



		2013		1999	
		回答数	%	回答数	%
1	国際的にみて高い水準にある	68	65	35	43
2	国内では高い水準にある	25	24	35	43
3	国内的にも高い水準にあるとはいえない	2	2	1	1
4	わからない	9	9	9	11
5	無回答	0	0	1	1

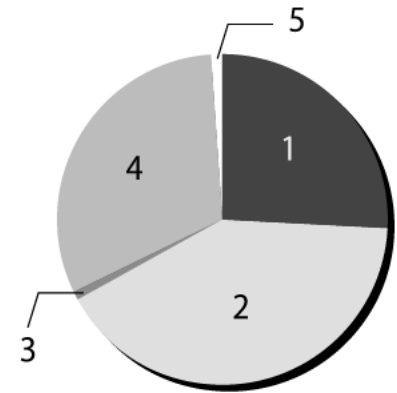
●質問 10-A 外国人研究員制度をどのように評価されていますか？

		回答数	%
1	高い成果をあげている	51	49
2	一定の成果をあげている	28	27
3	成果はあがっていない	0	0
4	わからない	24	23
5	無回答	1	1



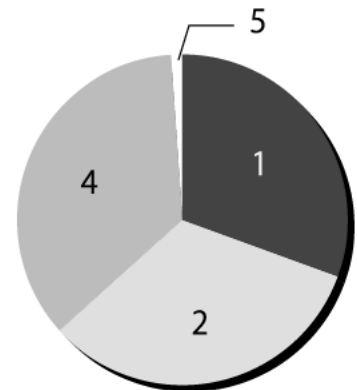
●質問 10-B 客員研究員（客員教授・准教授）制度をどのように評価されていますか？

		回答数	%
1	高い成果をあげている	27	26
2	一定の成果をあげている	43	41
3	成果はあがっていない	1	1
4	わからない	32	31
5	無回答	1	1



●質問 10-C 鈴川・中村基金奨励研究員制度をどのように評価されていますか？

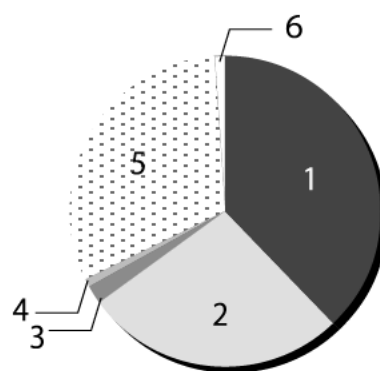
		回答数	%
1	高い成果をあげている	32	31
2	一定の成果をあげている	34	33
3	成果はあがっていない	0	0
4	わからない	37	36
5	無回答	1	1



センターの教育活動について

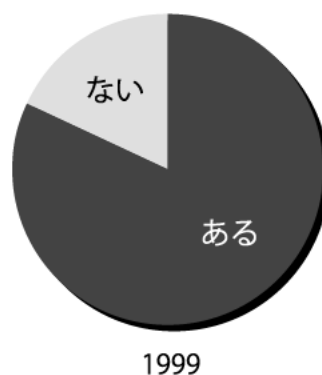
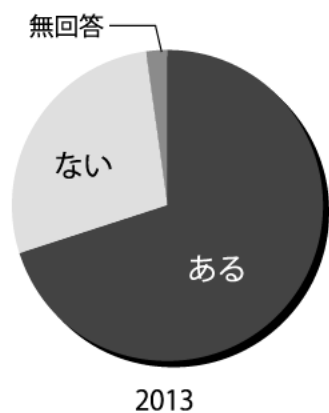
- 質問 11 センターは、2000 年度から北海道大学大学院文学研究科の歴史地域文化学専攻のなかに設けられたスラブ社会文化論専修において、大学院教育を行っています。この教育活動をどのように評価されていますか？

		回答数	%
1	十分な成果があがっていると評価できる	40	38
2	ある程度の成果はあるが、不満足な面もある	28	27
3	あまり成果がなく、改善・努力が必要である	2	2
4	センターは研究活動に専念すべきである	1	1
5	わからない	32	31
6	無回答	1	1



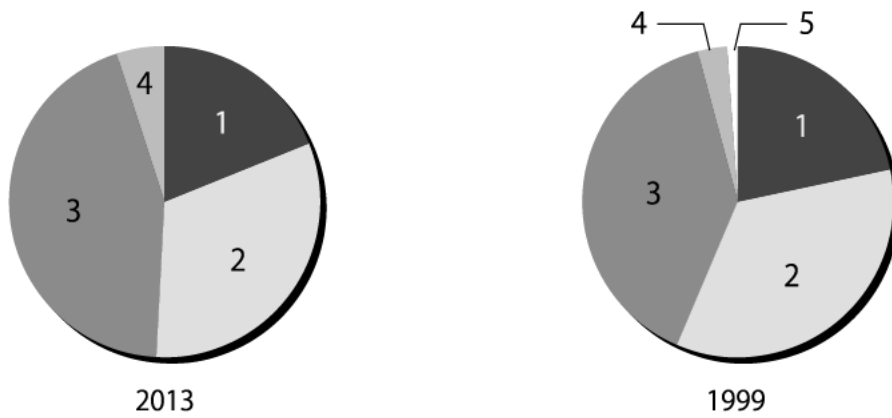
情報・資料サービスについて

- 質問 12 センターの資料（新聞・雑誌・図書等）をこれまでに利用したことがありますか？



		2013		1999	
		回答数	%	回答数	%
1	ある	73	70	67	82
2	ない	29	28	15	18
3	無回答	2	2	0	0

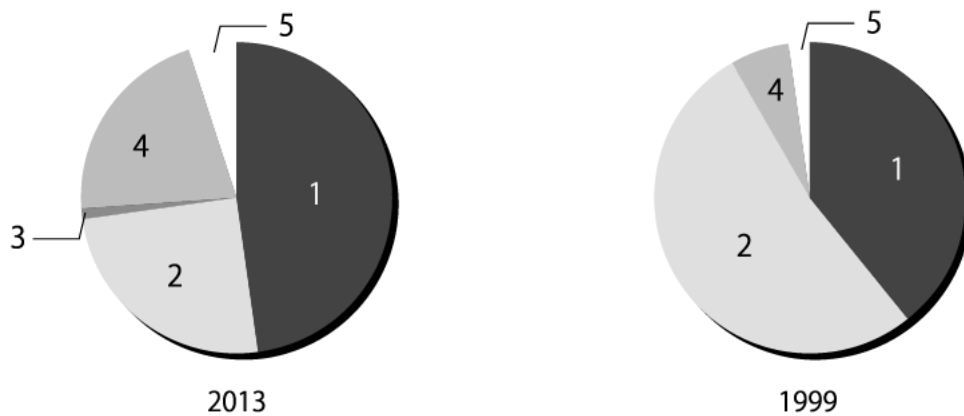
●質問 12-A 質問 12 で、センターの資料を利用したことが「ある」と答えられた方への質問。
あなたの研究にとってとくに重要なセンター所蔵資料はどれですか？（複数回答可）



		2013		1999	
		回答数	%	回答数	%
1	新聞	30	19	31	22
2	雑誌	50	32	48	35
3	図書文献[マイクロ資料を含む]	67	44	55	40
4	その他	7	5	4	3
5	無回答	0	0	1	1

●その他の内容
旧ソ連地域の1/20万地図(1)／
センターの刊行物(1)など

●質問 13 センター所蔵資料をどのように評価されていますか？



		2013		1999	
		回答数	%	回答数	%
1	国際的に高い水準にある	50	48	32	39
2	国内との比較で高い水準にある	26	25	43	52
3	国内との比較でも高い水準にあるとはいえない	1	1	0	0
4	わからない	22	21	5	6
5	無回答	5	5	2	2

●質問 14 センターのホームページを利用されたことがありますか？



		2013		1999	
		回答数	%	回答数	%
1	ある	101	97	57	70
2	ない	0	0	25	30
3	無回答	3	3	0	0

●質問 14-A 上で、「利用したことがある」と答えられた方への質問。あなたはセンターのホームページのとくにどの部分を利用されていますか？（複数回答可）

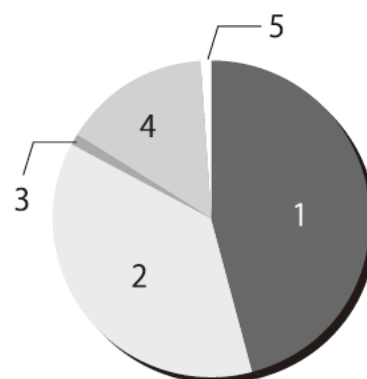


		2013		1999	
		回答数	%	回答数	%
1	センターの活動紹介(ニュースレター、プログラム紹介を含む)	78	28	27	20
2	図書、出版情報	35	13	16	12
3	オンライン化された出版物(『スラヴ研究』、ActaSlavica、シンポジウム報告集など)	70	25	10	7
4	学会・研究会情報	71	26	25	18
5	データベース	20	7	16	12
6	その他	1	0	42	31

●その他の内容
1999年度のその他のうち、「リンク集」の回答数が41

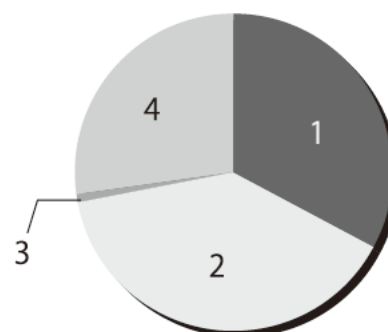
●質問 15-A センターが刊行している和文雑誌『スラヴ研究』を全体としてどのように評価していますか？

		回答数	%
1	非常に高い水準にある	48	46
2	比較的高い水準にある	38	37
3	高い水準にあるとはいえない	1	1
4	わからない	16	15
5	無回答	1	1



●質問 15-B センターが刊行している欧文雑誌 Acta Slavica Iaponica を全体としてどのように評価していますか？

		回答数	%
1	国際的に高い水準にある	34	33
2	国内で刊行される欧文雑誌として高い水準にある	41	39
3	国内との比較でも高い水準にあるとはいえない	1	1
4	わからない	28	27



●質問 16 上記質問以外の事項で、センターの研究、教育、組織・運営、共同利用・共同研究拠点としての活動、広報、社会連携、学会連携などについてご意見やご提言があれば、自由にお書きください

- 1 研究費の関係があるのでしかたないことは認めますが、この数年シンポジウムや各種プロジェクトが研究費のついで特定の課題に偏重しすぎていて、自分の研究領域と関わりの少ないプロジェクトが主体の時であればシンポジウムや研究会にそもそも足が向かない、ということが続いています。特定の課題とは別の企画ももう少し増やすようにできるとよいのですが（もちろんそれが難しいことも承知はしているのですが）…
- 2 今回、予算削減措置と関係して、ロシア・スラブ関係雑誌が削減対象となっていると聞く。しかしこのような雑誌・新聞は、本国を除けば日本だけではなくアジアでもスラ研しかないものが多い。削減するとしたら、日本語で出ている新聞雑誌からであるべきだ。今回、最近増えている日本の新聞雑誌を対象としているのか？境界研究がらみで増えているのは理解できなくもないが、しかし削減となると、スラ研のアイデンティティからいっても、非スラブ語雑誌・新聞からではないのか？

- 3 国内の諸関連学会(国際政治学会、比較政治学会、ロシア東欧学会、アジア政経学会など)との連携・協働を進めたいかががでしょうか。スラブ研究センターの「開放」が実質的に進められるように。
- 4 今後も、我が国のスラブ地域の研究の発展を支える機関であってほしい。
- 5 スラブ研究センターはこの20年ほどで、日本のロシア研究・スラヴ研究を文字通り国際的水準にまで引き上げました。とりわけ英語圏をはじめとする世界の研究者に対して、日本国内の研究成果を英語で発表するように若手研究者に促し、かつセンターの所員自身も率先して範を垂れてきたことの意義は、どれだけ強調してもし過ぎることがありません。これからもこれまで同様に国際的に高い水準の研究・教育活動を維持されることを心より願います。
- 6 新学術やGCOEなどの大型プロジェクトに取り組む中で、スラ研の体質も徐々に変化しつつあるが、研究や社会連携の点で枠組みを変えていく努力が、さらにこれからも求められる。研究面では、スラブ地域のみならずユーラシア全域を視野に入れた研究機関としての存在価値をアピールしていく。そのためには名称の変換も議論していく必要があるだろう。社会連携においては、文科省や大学間の交流のみならず、NGO団体や一般企業を含めた組織との連携を模索する必要がある。
- 7 今後とも、世界的拠点として、共同研究等のハブとして頑張っていたきたい。
- 8 これからも引き続き共同研究拠点としてさらに発展していくことを期待しております。
- 9 国際的にも高い水準にある、日本の中では稀有な研究組織であり、今後とも現在の水準が落ちることのないように存続、発展させて欲しい。日本のスラブ研究全般の水準を引き上げ、優れた若手研究者を育てるためにも、今後とも健闘して欲しい。専門性が高過ぎて、日本国内で文科省などから十分な評価を受けていないのではないかとと思われる点があるので一般向けの広報・PR活動にも力を入れるとよいのではないだろうか。
- 10 COEプログラム「境界研究の拠点形成」では、日本近隣を文字通り東西南北に縦横無尽に研究対象とされており、かつ、グローバルな領域においても同様の研究方法であり、「境界」という対象をダイナミックに捉える全く新しいアプローチとして非常に野心的プロジェクトだと感心しています。センターの研究、その他の活動全体を考慮すると、「スラブ」研究には取まり切れない幅広さがあり、歴史のある名称ではありますが、発展的改名も考慮されてはいかががでしょうか、たとえば、「スラブ・ユーラシア研究センター」くらいまでは拡げてもいいのでは？
- 11 全体として非常に外に開かれた独特の制度作りをしている点は高く評価できる。現在の人員規模では、これ以上の活動の拡大は望めないのではないかと。
- 12 中東欧に関する研究活動をもっと充実させてほしい。
- 13 貴研究センターはわが国で唯一の「スラヴ研究」の拠点であり、存在意義はひじょうに大きいと思います。国内で比較できる対象が思い浮かびませんから、その活動がどの程度の水準にあるのか、客観的に判断しがたいところもありますが、私個人としては貴研究センターの存在と活動から、絶えず大きな刺激を受けています。この「精神的権威」を今後も維持なさってください。せっかくの機会ですから、ひとつだけ気になる点を書きます。一階の図書室を利用するとき、大量の貴重な資料が所蔵されているのに、一般の利用者にもわかりやすい形で整理されていないのではないかと、という印象を持つことがあります。ちなみに図書室の職員の方々の対応には不満はありません。察するに、予算と人員の規模に起因する問題なのではないかと。これは個人的な主観的感想ですから、深刻に受け止めてくださる必要はありません。

- 14 ソ連崩壊前後から顕著な研究分野の拡大と各分野での研究の進展状況を考えると、センターの人員は明らかに不足している。このままの状態では国際的な競争での立ち遅れは必至であろう。それは大規模な国際会議を開催しても、それで埋められることはないと思う。人員のさらなる拡充が必要だ。また、新しい企画を構想する研究員の姿勢を高く評価しつつも、基本的なものを置き忘れていく傾向があるのではないかと危惧している。新しく始めたプロジェクトが、次の企画を生むという自然な動きが出ているのか、あるいはその場限りで終わっているのか、再検討することも5年に一度程度は必要だろう。結局、人文・社会科学の研究は、さして新しくないテーマをめぐる研究が次世代の者に継承され、着実に深められることが基本的あり方だと思う。その結果として国内の研究者を結びつけるのだと思う。
- 15 低温科学研究所とスラブ研究センターで実施している共同研究に携わっているものです。北海道大学内における二つの機関による文理融合研究は大変順調に進んでいると思います。日頃のご協力を感謝すると共に、今後もスラブ研究センターがロシア研究の国際的な拠点とし、また、人文社会科学のみならず、広い意味での学際研究の場として機能してくださることを期待しております。
- 16 センターとセンター所属研究者の国際的活躍に刺激を受けています。ユーラシア地域大国プロジェクトに関らせていただいたことは、中国研究者としての自分の、研究上の「転機」ともなりました。
- 17 (1) 上記11にて「センターは研究活動に専念すべき」と回答しましたが、1999年度以前の制度に戻した方が良いのでは、という趣旨です。専修コースが創られる以前も、センターの先生方は教育にはある程度携わられていたと理解しています。研究する師の背中を見て若い研究者が育つ、ということもあるのではないのでしょうか。いずれこの大学も同じように教育と研究双方に首を突っ込まなければならない、というのでは特異な学問はできないように思います。日本に一つくらい、（教育は従たる仕事として残しつつも）スラブ・ユーラシアの研究に専念するという機関があっても良いように思います。
- 18 北海道における唯一の地域研究拠点であり、特に若手の地域研究者にとっては、貴センターの取得されたプロジェクトをとおして異なる分野や地域の研究者と交流する貴重を得ることができ、国際的な視野を獲得する大きな助けともなっていると確信している。
- 19 シンポなどの各種研究活動もさることながら、特に外国人研究員制度と鈴川・中村基金奨励研究員制度は、日本の研究交流を深め、レベルを向上するのにとても役立っていると思います。維持するにはとてもご苦労があると思いますが、ぜひ続けていただきたいものです。
- 20 新しい科研費の枠組みを利用して、Acta Slavica Iaponica をスラブ・ユーラシア研究の国際誌として一層高めていくことも考えられてはどうでしょうか。結果として、日本の研究水準をより広く伝えることにも貢献すると思います。
- 21 国内学会との連携については、より積極的になり、海外と国内を結ぶハブ役としての機能の強化・組織化を図ってもよいかもしれません。国内学会の年次大会の開催をセンターで行い、そこにセンターのリソースを生かして海外研究者を招くなど。
- 22 2013年4月から共同研究員となりましたが、このアンケートがスラブ研究センターからの最初の連絡であったように思います。最初のお話しでは、研究会情報など流していただけということでしたが、現在まで研究会などは行われなかったということでしょうか。行われていたのであれば、もう少し連絡を密にしていたきたいと存じます。
- 23 今後、ますます意義が大きくなる研究の拠点です。ご活動に期待しています。

- 24 海外の学会等で会う研究者から、よくスラブ研の名前を聞きます。スラブ研が世界的な研究機関であることは間違いのないと思います。今後も日本のスラブ研究の中心として、国内にも国外にも開かれた研究機関であってほしいと願っています。
- 25 共同研究の貴重な場を提供していただき感謝しています。ぜひ今後も続けていただくことで、国際的にも国内的にも研究貢献をしていただきたく思います。
- 26 前のCOEの頃からでしょうか、センターの各スタッフの活動もさることながら、センターとして、1) 国際、2) 国内、3) 学内 のいずれのレベルでも拠点として、あるいはハブとして機能しようという方向性が顕著となったと感じます。高く評価すべき点だと思いますし、関係者としてたいへん心強く思っています。その意味で、センターの今後、中長期的な動態変化が気になりますが、人事等もたいへんうまく行き、心配は無用であるように見えます。高いレベルでの活動を維持することは楽ではないと思いますが、ご尽力に期待したいと思います。
- 27 昨今、非スラブ圏を対象とした研究連携が進んでいることは歓迎すべきだが、本来同センターが中心的に担うべき、スラブ・東欧の地域研究における基本的な役割については今一度確認すべきであろう。また各種シンポジウムのテーマ設定にも偏りが見られ、人文学、とりわけ、美術、映画、サブカルチャーなどの文化研究の状況については不十分であるように思われる。
- 28 国際的発信を含めてアカデミズムの世界での貢献は多大なものがあるが、国内の一般市民向けの発信、とりわけ著作物の刊行にももう少し力を入れるとよいと思う。

指摘された諸点に関するスラブ研究センターの取り組み・対応状況

回答からは、スラブ研究センターが世界的な研究拠点として自ら高い水準の学際研究を行うと同時に、日本のスラブ・ユーラシア研究を国際化させ、他分野の研究者にも刺激を与えてきたという、研究者コミュニティからの評価を窺うことができ、関係者一同の苦勞が報われる思いである。外国人研究員制度、鈴木・中村基金奨励研究員制度をはじめとする開かれた制度作りが評価されていることも心強い。

以下、課題や問題点として指摘された事柄について、センターの取り組み状況や今後の対応方針を述べる。

基礎研究の位置づけおよびプロジェクト間の継承関係について

1 14 への対応

プロジェクトには新規性が求められるため、それを前面に出すと、基礎研究をおろそかにしているような印象を持たれるかもしれないが、センターの基本的使命であるスラブ・ユーラシア地域の総合的研究と新規性・先端性との両立には、常に意を用いている。たとえば地域比較研究を行う際に、センターの研究者がスラブ・ユーラシア地域に関する第一級の専門家であり続けることが、中国研究やインド研究を代表する専門家たちと比較の作業をするために不可欠であることは、明らかだろう。また、プロジェクト以外の諸研究会でも地道なテーマに取り組み続けている。

大型プロジェクト間の継承関係について言えば、重点領域研究「スラブ・ユーラシアの変動」（1995～97年度）ではスラブ・ユーラシア内の多様性に注目して「自存と共存」をキーワードとし、この関心が発展して、21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」（2003～07年度）では多様性の単位としての「中域圏」、隣接地域との相互作用としての「跨境」、世界全体との関わりとしての「地球化」の研究に取り組んだ。こうした流れの中で、世界的な視野の中でスラブ・ユーラシアと他の諸地域の比較や境界の研究を本格的に開花させたのが、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」（2008～12年度）とグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」（2009～13年度）であった。

名称の変更について

6 10 への対応

ご提案の通り、ユーラシア全域を視野に入れた研究活動の実態を反映させるため、2014年4月より「スラブ・ユーラシア研究センター」に改称した。

国内の関連諸学会との連携・協働について

3 7 21 への対応

この点は、近年まさに意識的に取り組んできたところである。評価資料3(6)で述べたように、2010~12年度の3年間だけでも、ロシア・東欧学会、日本国際政治学会、アジア政経学会、内陸アジア史学会、日本西スラヴ研究会、日本ロシア文学会と、大会開催校としての共同企画や、共同のシンポジウム、フォーラムを開催した。センターに滞在する外国人研究者の日本の学会・研究会への派遣も以前から行っている。また、日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)の事務局として、ICCEES(国際中欧・東欧研究協議会)世界大会やスラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンスの開催および参加奨励のために、諸学会との連絡調整を行っており、海外と国内を結ぶハブとしての役割を果たしていると考えている。

中東欧に関する研究活動を充実させるべきだとの点について

12 への対応

中東欧の「ヨーロッパ化」やセンターの人員構成の変化に伴い、センターにおける中東欧研究の位置づけは変わってきたが、近年はスラブ諸語の比較研究や環境問題の研究など、以前にはなかった特色のある研究活動を行っている。ただし、中東欧諸国の政治や近現代史の研究が以前より手薄になっていること、中東欧全域をもれなくカバーしているとは言えないことは確かであり、今後補強・増強を図りたい。

シンポジウム等のテーマ設定に偏りがあり、文化研究が不十分だとの指摘について

27 への対応

センターは最近20年ほどの間、研究活動の分野的なバランスの是正に取り組んできた。研究部の教授・准教授の構成を分野別に見ると、1990年代前半には社会科学系が人文

系の倍以上であったが、現在はほぼ同数になっている(双方にまたがる研究を行う教員が少ないため、厳密な計算はできない)。国内の地域研究諸機関の中で、人文・社会科学諸分野の均衡が最もよく取れている組織の一つだと思われる。文化研究についても、国際シンポジウム(2006年度冬、2010年度夏など)を開催しているほか、最近では若手が企画する研究会がこの分野で増えている。共同研究公募などを通して、センター外からの企画提案にも対応するので、具体的な提案をお寄せいただければ幸いである。

社会連携・広報・出版について

6 9 28 への対応

ビジネス界との関連でロシア等の研究・調査を行う機関は他にあること、スラブ・ユーラシア地域で活動する日本のNPOは少数であることなど、センターの社会連携活動には自ずと限定要因があるが、国際交流の実務家との交流はできる限り密にするよう心がけており、評価資料6(7)にあるように、日本の対スラブ・ユーラシア諸国外交や経済交流について活発に提言してきた。近年は特に国境問題解決への提言や、境界地域の自治体との連携を行っている。

一般社会に向けての広報・発信としては、従来からの公開講座の実施、ニュースレターの発行に加え、2008年度からのメールマガジン発行、2009年度からの博物館展示、2012年度からの公開講演会の実施、2013年度の研究所公開やホームカミングデーへの参加など、取り組みを強化している。共同利用・共同研究拠点中間評価の結果からも分かるように、文部科学省からも高い評価を受けていると考えている。

出版に関しては、センターが刊行する雑誌、論文集などをウェブサイトに乗せて誰でも読めるようにしているほか、評価資料7(2)にあるように国内外の出版社を通しての本の刊行を近年増やしている。国境問題や中央アジア関連をはじめ、個々の教員が編集・執筆した一般書も少なくない。むしろ教員の単著による専門書の刊行を増やすことが当面の課題であろう。

研究会情報などの共同研究員への連絡について

22 への対応

センターからの研究会情報等の連絡は、主にウェブサイトとメールマガジンによっているが、2013度は新規に委嘱された共同研究員をメールマガジン送付リストに入れる作業が遅れ、その完了が本アンケート実施後になってしまう

という、申し訳ない事態であった。今後は、委嘱後速やかに共同研究員への連絡を開始するよう気をつけたい。

センターは研究活動に専念すべき との点について

17 への対応

センターの第一の使命は研究であり、ご意見にある「教育は従たる仕事」という位置づけは、実態の通りである。しかし同時に、全国的・国際的な共同研究拠点としてのセンターのリソースを活かし、世界的な研究潮流を踏まえた問題関心と国際的な発信能力を身につけさせる教育は、センターの特色ある活動の一部となっている。一人前の研究者に育つ過程にある若い人々がセンター内にいることは、センターの研究の活力を増し、また大学院生と若手の研究員、および鈴川・中村基金奨励研究員など外部の院生・若手研究者との交流は、それぞれにとって有益な刺激になっている。

図書室が一般の利用者に分かりやすい 形で整理されていないとの点について

13 への対応

センター図書室は長年の間、附属図書館への移動待ちの図書を大量に抱え、室内の図書資料の配置が大変複雑になっていた。幸い附属図書館の改修により、2012～13年度に一般図書を附属図書館に移動できたので、残った参考図書、雑誌、新聞などをより分かりやすく整理・配置するよう検討していきたい。

新聞・雑誌の削減は日本語のものから 行うべきだという点について

2 への対応

センターが所蔵する日本語の新聞・雑誌は、寄贈されているものと、特定のプロジェクト経費で購入しているものが多く、運営費交付金による購入は年間計20万円に満たないため、削減しても効果が薄い（外国の新聞には、1タイトルで10万円程度かかるものが少なくない）。

スラブ・ユーラシア地域で刊行される新聞・雑誌の削減は、予算および収納場所の逼迫による、苦渋の決断であった。利用の必要性が高いタイトルについて復活提案があれば、お寄せいただきたい。